

関ヶ原合戦時の大垣城 ～西軍の拠点是如何にして東軍となったか～

淡海歴史文化研究所

所長 太田浩司

はじめに

- ・西軍と東軍の決戦は、関ヶ原の東 13 キロに当たる大垣城攻防戦として行なわれる可能性があった。両軍は 20 日程、大垣城と赤坂との間で対峙し、南宮山の毛利軍は赤坂の東軍と戦うことを期待された後詰軍であった。この通りなれば、東西決戦は大垣城の後詰合戦となった。
- ・関ヶ原合戦後の大垣城攻撃については、「水野勝成覚書」や「おあむ物語」があり、多角的な検証が可能である。大垣から見た関ヶ原合戦を描く。

1 関ヶ原合戦への道程～岐阜城開城まで～

- ・豊臣秀吉没後からの石田三成ら奉行衆と、天下の主導権をたぐり寄せようとする徳川家康の水面下の対決は、慶長 5 年（1600）6 月、家康が会津の上杉攻めを行なうことで表面化する。家康は 16 日に大坂城を発つ。
- ・家康不在の畿内では、7 月 17 日に三奉行の名で家康の弾劾状が発せられ、三成方（西軍）と家康方（東軍）の対決は必至となる。
- ・西上する東軍と戦う西軍の大將三成は、最初三河・尾張国境、さらには尾張・美濃国境で、西上軍をくい止めようとする。8 月 10 日頃までは、清洲城主の福島正則の取り込み必死となっていたが失敗する。
- ・しかし、8 月 23 日の岐阜城の陥落などにより、三成の戦略が次々に破綻。東軍は大垣城の西北四キロの赤坂岡山へ 24 日に集結。大垣城の西軍との間で、合戦が行なわれる情勢が強くなる。
- ・岐阜城攻撃の前哨戦として、米野（笠松町）の戦いや竹ヶ鼻城（羽島市）の戦いがある。米野の戦いで活躍し、岐阜城籠城戦でも陣頭指揮をとったのは、織田秀信（三法師）の宿老・百々越前守綱家であった。綱家は岐阜城では本丸手前まで攻め込まれて開城の決断をする。籠城戦では腿（もも）に被弾している。
- ・8 月 23 日、三成は岐阜城支援のために長良川の渡し・河渡（岐阜市）まで出陣したが、黒田長政・藤堂高虎によって撃退された。岐阜城陥落で三成の木曾川での決戦、つまり美濃・尾張国境での三成の決戦構想が破綻し、決戦の地は美濃国内へ移る。

2 関ヶ原合戦への道程～杭瀬川の戦・決戦へ～

- ・石田三成は、城主伊藤盛正を説得して、大垣城へ8月10日には入っていたが、8月23日の岐阜城陥落を受けて、大垣籠城の思いを強くしたと思われる。
- ・9月7日になって、伊勢方面の戦闘を行っていた毛利秀元・吉川広家・安国寺恵瓊・長束正家・長宗我部盛親らが南宮山に陣を置いた。「細川忠興軍功記」によれば、その中には「秀頼様御弓鉄砲衆」も含まれ、3万の軍勢であったとする。
- ・9月14日に家康が赤坂本陣に到着すると、大垣城と岡山陣所の間で杭瀬川合戦が行なわれた。西軍の嶋左近と東軍の中村一栄の武将・野一色頼母の軍隊が戦い、頼母をはじめ30余人が討ち死にしたという。赤坂宿の西端にある兜塚は、討ち死にした頼母を葬り、兜を埋めた所と伝わる。
- ・その晩になって、家康は突然、三成の本拠の佐和山や、京大坂の西軍本拠を突く作戦に切り替え西へと進軍を始める。
- ・大垣城にいた三成は、その情報を得ると、決戦の場を美濃・近江国境の関ヶ原とし、南宮山の南側を通して先回りして東軍を迎撃した。三成としては、東山道と北国街道を押さえ、東軍の侵入を許さない布陣。
- ・結果は周知の通り、西軍の敗北、三成ら西軍の諸将はその場で討ち死にする者、逃亡する者、様々であった。

3 合戦前の大垣城攻防戦の状況

- ・関ヶ原河合戦を前にしての大垣城攻防戦については、東軍の保科正光（下総国多古の領主）が、その家臣たちに出した、同年8月29日付けの2通の書状が注目される。正光は当時、浜松城を守備していたが、先陣の美濃国の戦況を伝えている。
- ・大垣に籠城した西軍は石田三成、宇喜多秀家、小早川秀秋、島津義弘、小西行長ら2万の軍勢で、8月26日から8万の軍勢の東軍が攻城していること。
- ・三成は伊勢国に展開していた毛利軍に、大垣城の支援に来るよう（「後詰」という）連絡しており、大垣城攻防戦の前にこの毛利軍と、赤坂に集結した東軍主力との合戦が行なわれる可能性が高いことなどを記す。
- ・この大垣城攻防戦・毛利軍との戦いは、「天下の弓箭（合戦のこと）、この時に極まり候」であり、さらに大垣城攻防戦を指して「天下の落居は、ただこの一城に極まり候」と述べている。つまり、大垣城周辺での攻防戦が、今後の天下の趨勢を左右すると述べている。
- ・この段階で、正光をはじめとする東軍方としては、大垣城周辺の決戦により、勝敗が決まると考えていた。この点は、石田三成の考えと一緒であったが、実際は14日晚の家康の決断により、東軍は西へ動き、西軍はその進軍を止めるため関ヶ原に至った。
- ・この東軍の移動は、東軍諸将すら意外で突然の行動だったが、これに連動して関ヶ原で戦わざる得なくなったのは三成にとって誤算だった。この天下分け目の合戦が、三成の思い通り大垣周辺で行なわれていたら、三成の勝機はあったかもしれない。

〔史料1〕保科正光書状「保科御事歴」

度々書状到来、披見候、其元先々何方も静ニ候之由心安候、弥油断有間敷候、尾州表之事ハ定而其許へも可有其間候、去廿二日・廿三日ごうとの渡り・萩原之渡兩日ニ兩度之合戦、何れも味方大勝ニ而、兩度ニ五千程被討取候、鎮（ママ）共何れも関東へ参候、其上美濃・尾張敵之城一度ニハツ明渡候、京勢軍ニ打負たるい（垂井）・赤坂ヲ被取切、各大柿へ遁竈候、則此方へ人数押寄、去廿六日より被取詰候、大柿竈城衆ハ石田治部少輔（三成）・筑前中納言殿（小早川秀秋）・備前中納言殿（宇喜多秀家）・小西撰津守（行長）・島津兵庫助（義弘）、右之衆ニ而候、式万程ニ而取竈之由候、取巻候人数ハ八万之御着到にて候、天下之落居ハ只此一城ニ極候間、森（毛利）を始として西国衆致後詰候はん哉【下略】

（保科）肥後守

八月廿九日

正光（花押）

松沢喜右衛門尉殿

丸山半右衛門尉殿

吉川織部佑殿

- ・もう1通の同日付黒河内長三郎宛の保科正光書状（「保科御事歴」）では、「大柿ニ竈候人数式万余有之候由申候間、小城ニ而さやう之人数楯竈候者輒詰候ハんと存候」とある。また、「大柿之落城前ハ対陣ニ而候ハん欤と存候、然則天下弓箭此時ニ極候」と述べる。

4 大垣城水攻め

- ・9月初め、大垣城攻撃について、家康は水攻めを命じている。しかし、家康の使者として赤坂に來た村越直吉の意見で、この水攻めは中止されている。東軍の「御威勢」に関わるためという。
- ・清水進氏は『大垣城の歴史』で、水攻めがあったとしたら、大垣城の東北にある柿之木戸用水の「大島大樋」を開いて、揖斐川の水を大垣城下に引水することになったろうと述べている。「大島大樋」は、大垣市大島町にある。

〔史料2〕徳川家康書状「真田家文書」

急度申候、仍大柿治部少輔（石田三成）・島津（義弘）・備前中納言（宇喜多秀家）・小西撰津守（行長）籠居候、即取巻可成水責とて、早速令出馬候、坂戸（越後国）へ敵於相動者、無油断加勢尤候、切々飛脚を遣、被添力事肝要候、恐々謹言、

九月朔日

家康（花押）

真田伊豆守（信幸）殿

〔史料3〕徳川家康書状「関ヶ原合戦史料集・古文書集」

急度申候、仍大柿治部少輔（石田三成）・島津（義弘）・備前中納言（宇喜多秀家）・小西撰津守（行長）籠居候、即取巻可被成水責とて、早速令出馬候、自然景勝其口於相働は、

真田伊豆守（信幸）・本多豊後守（康重）・平岩主計頭（親吉）・牧野右馬允（康成）申付候条、各へ談合、其許城堅固可被相押肝要候、恐々謹言、

九月一日

家康 判

堀丹後守（直寄）殿

〔史料4〕細川忠興軍功記「関ヶ原合戦史料集」・「細川忠興軍功記」
大垣之城水攻に成可申由、西尾豊後（光教）殿被申ニ付、豊後殿承水堰上げ、早町に水上げ申時分、村越茂助（直吉）殿江戸より上使に赤坂へ着被申、茂助殿被申は水御仕懸候儀可有御待候、左候に成候て、御威勢無之、急度御出馬被成候様ニ可仕と被申に付、水堰止申候頃、九月三日・四日にて可有御動座事、

5 伊達政宗が記した毛利軍後詰

- ・伊達政宗は、家康に近い堺の商人・今井宗薫との遣り取りで、南宮山の毛利軍のことを「大柿為助衆」・「大柿へ之助衆」と呼んでいる。これは、大垣城と対峙する赤坂の東軍の後詰との意味である。この西軍の後詰衆と赤坂の東軍との合戦が当初想定されていたが、実際の戦場は関ヶ原へ移った。
- ・また、佐和山落城の様子を使者からの伝聞として記す。

〔史料5〕伊達政宗書状 大阪歴史博物館蔵文書

【前略】

一、其表之義、大柿為助衆、毛利宰相（秀元）・長大（長束正家）・吉川（広家）・安国寺（恵瓊）被罷出之由、依之先此衆へ可被打向、即時ニ可被討果之旨、尤存候、可被得勝利事、必定と存候、

【後略】

（慶長五年）

九月廿九日

政宗（花押）

村茂助（村越直吉）様

宗薫（今井兼久）老

人々御中

〔史料6〕伊達政宗書状 伊達正景他五名宛

【前略】

一、去十五日、大柿へ之助衆へ、是非可被及合戦之由候而、十四日ニあか坂近辺へ御陣越候处ニ、大柿ニ籠候衆夜中ニまきれ、ミのゝ山中と申所へ打返し陣取候を、十五日未明ニ無二ニ被切懸押崩、大谷形（刑）部（吉継）・戸田武蔵（勝成）・島津又一郎（又七郎豊久力）・平塚因幡（為広）、其外先をも心懸候衆、其場ニ而悉被打補候、石田治部・備前中・島津・小西など者、山へ逃入候間、于今不相見之由候、

一、さほ山（佐和山）、宗くん（薫）の書中二者、本丸ハ于今持候由ニて候か、飛脚すりはり（摺針）をとをり候へハ、はや本丸も焼項を見て来候、飛脚ハ自之付候中間にて候、

【中略】

（慶長五年）

九月晦日

政宗（花押）

伊上州（伊達政景）

江南（保土原江南斎行藤）／民部（津田民部景康）／さつま（大条薩摩守実頼）／成左（成田左平次重継）／鈴七（鈴木七右衛門重信）

6 合戦前後の大垣城攻防戦の展開

- ・大垣城は東軍が関ヶ原へ向かった後の14日夜半、水野勝成・西尾光教・松平康永らは大垣城を攻撃したと言われる。三の丸の守将・秋月種長や高橋元種は、これを防いだ。この時、大垣城を地元の武士7人「七騎多門」がよく防戦したという伝承が残る。ただし、大垣城攻めは、15日夜の誤りの可能性が高い。
- ・江馬活堂筆『藤渠漫筆』は、この「七騎多門」の一人と目される「松井喜右衛門方家譜」によって、以下のように記す。

【史料7】江馬活堂筆『藤渠漫筆』第二編

一、慶長五年庚子年九月十四日之頃、諸将御城責之節、七人之者上下二十七人能相防候ニ付、晩方御人数御引取被成、依之此所七騎多門共七間多門共申候由申伝候、

一、九月十四日諸将関ヶ原え御出張、其上御城中同士軍御座候ニ付、七人之者共申合、近在え引取申候処、西尾豊後守・水野日向守様七人之者共被招呼、御城中え和睦之取扱仕候様被仰付、七人之者共御両方え御使相勤、西尾豊後守様御本丸之大将福原右馬介様え、為人質谷瀬兵衛ト申者被差出候節も、七人之者共同道仕候て相渡申候上、九月廿二日福原右馬介様事御出城之由申伝候、

*『大垣市史』資料集『藤渠漫筆』は、七騎を松井二騎・堀一騎・成田一騎・沼波玄古秀実・岡太郎左衛門秀季・同清太夫秀知とする。

- ・上記の『藤渠漫筆』によれば、福原長堯の大垣城本丸開城は22日（通説は23日）。それを仲介したのは「七騎多門」とする。
- ・大垣城にいた相良頼房（二の丸）・秋月種長・高橋元種（以上、三の丸）は16日に東軍に身を投じ、三成に近い熊谷直盛（本丸）・垣見一直・木村勝正・豊統親子（以上、三の丸）らを誘殺した。本丸にいた三成の~~妹~~婿の福原長堯のみ籠城を続けたが、23日になって開城した。東軍の松平康長が城を受け取った。
- ・熊本県人吉市の相良家の菩提寺・願成寺の墓地には、石田三成と、この時殺害された、熊谷親子・垣見・木村親子の墓がある。三成の33回忌に相良頼房によって建立されたものである。

7 「水野勝成覚書」から分かること

・「水野勝成覚書」は、後に備後福山藩主となった家康の家臣・水野勝成の覚書。寛永 18 年 (1641) 5 月の勝成の書名と花押・黒印が押される。

〔史料 8〕水野勝成覚書 (抜粋) 『愛知県史』資料編 14

【前略】

拙者 (水野勝成) 并に水野市介 (勝成弟) 十五日夜のうちより罷立、かくてん (楽田) を押やふり、大垣の城へのりこみ二の丸までとり引足にて町中に火をかけ、林と申寺内大垣より北に御座候それまで引取申候、

【中略】

大垣十五日之朝 (夜力) のりこみ二の丸までとり本丸はかりに仕候よし関が原権現様へ注進候、

【中略】

十五日関が原の御合戦よりはやくおしこみやふり申候、御意被成候ハ何も聞 へ水野六左衛門 (勝成) 大垣をやふり、二の丸まで取、本丸はかり仕候由申越と被仰、かきりもなき御感にて御座候よし申候、十五日の朝 (夜力)、おしこみ申時、

【中略】

二の丸の門のきわにくま鷹のへや御さ候、門をひらき相良もの三人罷出、鈴木与八郎・神谷久右衛門と鎧を合候て引こみ候を、与ハ郎一人久右衛門一人兩人其場にてうち申候、

【中略】

十六日之夜、相良左近兵衛・高橋右近・秋月長門三人の名付にて、城中より文をこし申候、…其子細は、本城に福原居申候間何とそよひ出し腹をきらせ、相残るもの共も同前に討取可進上之候条、是を忠節に被成、前々のことく身上たておかれ候ハ、忠節申度よし申越候、

【中略】

然所に十八日城よりやくそくのこく相良兵部と申もの、熊谷内蔵丞・木村惣左衛門おやこ・寛和泉四人の首をもち、さいをふりまいり候間、

【中略】

丹波殿 (松平康永) もの十五日手にあい不申むねんに存候と申、皆城へおしこみ申候まゝ、拙者申候ハ何とてさやうに被仰付候やとかたく申候へとも、それをも聞あへすまいり候につき、その城におゐてハ中々さをハさせ申ましきと申、拙者ものせり合候てくろかね門までおしこみ申候、城のり候事ハ相ならすくろかねの門につきい候内に、手負死人数多出来申候、それより引取拙者者ハ林と申寺内に陣取罷有候、権現様よりさい／＼御使被下、大垣の城何とそあつかいに仕り請取はやく罷上り可申候由御説被成候に付而、西尾豊後 (光教)・拙者兩人、大垣の城請取、其跡の留守居松平周防 (康重) に相渡し罷上り候、福原右馬之助ハ大垣より高野へ送り候てつかい申候、

・本書によれば、大垣城への攻撃は、15 日夜 (朝は誤りであろう) で、城の東北である楽

田（大垣市楽田町）や林（同林町）から行なわれた。二の丸まで攻め入ったら、相良の者が出て来たとあるので、相良頼房が二の丸に陣していたのは事実だろう。

- ・相良・秋月・高橋の離反は18日のこととある。その直後に本丸への攻撃を仕掛けたが、攻城軍も多大な損害があったようである。その後、家康の命を受け、本丸の福原との和議を結んだことが記される。

8 『おあむ物語』と大垣城籠城戦

- ・『おあむ物語』は、関ヶ原合戦時、大垣城に入城した石田三成の家臣・山田去暦の娘が「おあむ」が、孫たちにせがまれて語った内容が記されている。享保15年（1730）の谷垣守の奥書がある。刊本は天保8年（1837）の三可書屋の校訂があり、弘化2年（1845）に和泉屋金右衛門が出版している。

【史料9】『おあむ物語』 岐阜県郷土資料研究協議会発刊

子どもあつまりて。おあん様。

むかし物がたりなされませといへば。おれが親父ハ。山田去暦きよれきというて。石田治部少輔殿に奉公し。あふみのひこ根に居られたが。そのうち。治部どの御謀反の時。美濃の国おほ垣のしろへこもりて。我々みな／＼一所に。御城にいて。おじやつたが。不思議な事が。おじやつた。よな／＼。九つ時分に。たれともなく、男女三十人ほどのこえにて。田中兵部どのう。田中兵部殿のうと。おめきて。そのあとにて。わとというてなく声が。よな／＼。しておじやつた。おどましや／＼。おそろしう。おじやつた。その後。家康様より。せめ衆。大勢城へむかはれて。いくさが。夜ひるおじやつたの。そのよせ手の大將は。田中兵部殿と申すで。おじやる。

- ・この記述の後、城中から石火矢（大砲）を撃った話、天守で女性たちが討ち取り首にお歯黒を塗った話、14歳の弟が鉄砲玉にあたり死亡した話、去暦は家康の手習いの師匠だったので城外へ出ても助けるとの知らせが来た話、「おあむ」たちは盤もといに乗って堀を渡り助かった話、逃亡途中で母が赤子を出産した話、「あおむ」は寛文年中（1661～73）に80歳余りで死去したことなどを記す。
- ・田中（兵部）吉政が攻城軍の大將であるとすれば、大垣城ではなく佐和山城の話となる。ただ、籠城が長期化した様子からすると大垣城の話か？佐和山城は1日で陥落している。
- ・堀を盤で渡る話も、水堀が本丸近くでない佐和山城よりは、水堀に囲まれた大垣城に合致しているように思える。
- ・昔話なので、山田去暦一家が経験した大垣城や佐和山城の籠城戦など複数の戦いを一つの戦いとして混同している可能性が高く、大垣城籠城戦の史料としては、そのまま使えない。

まとめ

- ・大垣城への攻城戦、さらには南宮山の「後詰」と赤坂岡山の対峙戦となっていれば、合戦は長期化し、西軍勝利の道筋も見えたかもしれない。その意味では、14日夜の家康の

